

5. 素因を知れば思いがけないことも想定外にはならない

自然現象もそれを誘因とする自然災害も発生に理由がないものはありません。そして、何時起きてもおかしくないわけで、弱いところをかぎつけてくるものだという気がします。例えば、水害や地震・津波、突風などの自然災害が怖いのは、突然に想定以上の被害をもたらすということだと思えます。しかし、自然災害を素因からみれば、被害が発生する場所は、災害の種類や、発生の履歴をもとにある程度推定できます。もちろん、ジャストポイントではありませんが、どのようなところで、何がおきやすいのかということを知っておくことは大切なことです。それは、被害を繰り返さないということやリスクを事前に知ること、発生時の輻輳した情報を整理することも出来ます。そのことで、次のステージに展開されることが読めますので、適切な行動につなげることが可能になります。災害時に一番不安なのは、何が起きてどうなるのか、二次災害は起きないのか、どこに避難すべきなのか、何をどうすべきなのかということです。情報が錯綜する中での冷静な判断は、かなり難しいものです。そういう意味でも、自分がいる地域がどのような災害リスクを有しているかを事前に把握しておけば、避難の時期、方法の判断が適切に出来ることにもつながります。事前に自分自身の行動プランを持っていれば、発災時に適切な行動の選択が可能となります。素因は地形や地質のほかにも災害履歴や言い伝えなどで知ることが出来ます。いわば、自然現象がうまくそのような素因と反応することで災害になりやすいので、地域知を高めておくことは極めて大切なこととなります。残念ながら、災害は一度起きたからもう起きないという免疫性はほとんどありませんし、新たな条件では経験したことがないものも起きます。われわれの社会環境は、時とともに自然災害を増加させ、都市の集中という現象も加味されます。加えて日本列島では地史的にも形成年代が若く変動帯であります。山は崩れる、川は溢れるという地理的条件下にあることを忘れて、災害を招くような作為が多くなされています。つまり、地形地質自体の自然的変化の自由度を阻害するような人工改変が大きく支配し、気候変動が加速しています。まずは、自分たちの住む地域がどのような地史があり、どのような土地利用がなされてきたのを知ることは最も大切なことです。自然現象が抑止できないわけですから、それによる影響を出来る限り最小にして、「君子危うきに近寄らず」、自然との共生をしながら適応する検討が迫られているような気がします。